

汪曾祺小説における癒しについての研究

於 芳*

A Study on Healing in Wang Zengqi's Novels

YU Fang

In society, formations of organizations are highly effected by family structure. The relationship between boss and his man are often compared to that between father and his son. Political ideas are also the same. Political ideas would be significantly different, if the priority is whether the piety among father and son, or the equal relationship between husband and wife. In the 1920s in Japan, political ideas and highly common novels at the time, placed a special emphasis on affection between man and woman. At the field of the political ideas, Toyohiko Kagawa, Takeo Arishima, Itue Takamura, and Tetsuro Watsuji left extremely important writings. These changes opened the way in post-war democracy.

キーワード：癒し, 汪曾祺, 機能, 文学

Key Words : Healing, Wang Zengqi, function, literature

1. はじめに

汪曾祺（1920-1997）は中国現代・当代文学史上において有名な作家、随筆家、劇作家であり、「抒情的な人道主義者であり、中国の最後の純粋な“文人”¹⁾」と名付けられ、北京流派作家の代表的な人物である。汪は1920年春、中国の江蘇省高郵県（現在の高郵市）に生まれた。1939年西南聯合大学の中国文学科に入学し、有名な作家沈從文の指導の下で、文学の創作を学び、五四新文学の影響を受けて1940年代に文学創作を開始し、文壇にデビューする。その後、文学の空白期（1949-1979）を経験し、1980年代に文壇に再登場した。汪は外国文学の各流派の思想の影響を受け、中国古典文学の伝統を最大限継承し、自然・民俗・人情の結合を目指し、意識の流れとリアリズムの手法を用いて、古典と

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

現代を融合させ、人間性豊かな「風俗画」小説を創作した。これらの小説は汪曾祺ならではの「汪曾祺式」風俗画小説となっている。

1980年、汪曾祺の短編小説「受戒」は『北京文学』に掲載され、同年の北京文学賞を受賞した。汪曾祺は清新な作風で読者や評論家に注目されるようになり、当時の文芸評論界で“汪曾祺ブーム”を引き起こした。それ以来、汪曾祺ブームが長らく続いている。2020年7月の『光明日報』は“出版ブーム”“読書ブーム”，なぜみんな（汪曾祺を）愛しているか”と題して、汪曾祺ブームの盛況を記録した。2019年1月に人民文学出版社から刊行された『汪曾祺全集』（12巻）は2020年6月に3回目が増刷され、累計印刷部数が1.2万部に至るそうである。中国出版総署図書館の統計によると、2019年に汪曾祺を主題にするCIPデータは80余件、2020年に50余件ある。

汪曾祺の娘である汪朝の話によると、ここ5、6年で汪曾祺の読書人数がますます多くなり、とりわけ、SNSの流行につれて、汪曾祺作品のファンたちが作ったグループは次々と発見された。その上、汪曾祺作品がたびたび学校の教科書に入選された影響で、若い年齢層の読書人数も多くなった²⁾。なぜ、汪曾祺作品はそれほど人気があり、読者に何度も読み返されているのか。その理由は汪曾祺の文学作品が人々の心を癒す力を持っているからではないかと思われる。本文は汪曾祺の代表作「受戒」を中心に、その中における癒し諸相に着目し、その癒しの特徴を分析して、そこに隠されている人の心を癒す魅力を明らかにしたい。

汪曾祺の文学創作は大まかに三つの段階に分けられる。第一段階（1940年代）はモダニズムを摸索する段階であり、代表的な作品は「復讐」（1946）「小学校的鐘声」（1946）「緑猫」（1947）などがあり、意識の流れという手法を用いて、詩意に富んだ筆致で世間の人々の日常生活の様相を深くリアリズム的に描写した。第二段階（1950-1970年代）は主流文化に合流する時期とされ、主に京劇『範進中挙』（1955）、現代京劇『沙家浜』（1965）『紅岩』（1965）『杜鵑山』（1970）などの脚本を創作し、その中の『沙家浜』と『杜鵑山』は代表的な革命模範劇として中国で広く世間に知れ渡っていて、人の心に深く入り込んだ。1961-1962年の間に短編小説「羊舎一夕」「看水」「王全」を書いた。

第三段階（1980-1997）は伝統文化に復帰する時期と言われ、小説、随筆、脚本、評論など、膨大な量の作品が創作された。1980年、汪曾祺は小説「受戒」を発表し、自分の晩年期（1980-1997）に文学創作のクライマックスを迎えることになる。1980年代から1990年代後半までに、汪曾祺は小説98篇を創作・発表した。その数は生涯創作した作品総数の4分の3に達し、彼の文学生涯を代表するものである。その中で、1980～1983年までは彼の文学創作の最盛期と言える。この4年間で汪は小説を28編ほど創作し、中でも「受戒」（1980）と「大淖記事」（1981）はそれぞれ1980年度北京文学賞と1981年度全

国優秀小説賞および北京文学賞を獲得した。両者とも汪の故郷である1930年代の江蘇省の北部の高郵地域を舞台に書かれた風俗画小説の代表作である³⁾。

1980年に唐摯（1980）の「賛『受戒』」⁴⁾により始められて以来、今日までの40余年間に、汪曾祺研究が盛んに行われてきた。1980年代の汪曾祺研究は主に小説を中心に展開され、作品の伝統性と意義、小説の言語や文体、小説の審美は大いに重んじられた。季紅真（1983）は「作者が書いた人物は（中略）皆伝統的道德を有している人であり、」（これらの人の）素朴な道德理想は儒教の倫理を核心としている思想と密接に関わっている。」と論じ、汪曾祺の独特な審美態度は儒教と道教の融合に由来すると考える⁵⁾。1980年代の研究は汪曾祺作品に関する感想文のようなものが多く、それもその時代における中国の文学評論界の特徴の一つである。

1980年代末から1990年代にかけて、汪曾祺が創作した作品が多くなるとともに、汪曾祺研究は多様化してきた。たとえば、汪曾祺とリアリズム、汪曾祺作品と師である沈從文の作品の比較研究、汪曾祺と地域文化、汪曾祺散文とその文体に関する研究等。夏逸陶（1990）は「憂郁空靈与明朗洒脱——沈從文、汪曾祺小説文体比較」の中で、故郷への熱愛と構成上の散文的叙事は汪曾祺と沈從文の小説の共通点と指摘、生活経験や地域文化の差異から、両者の作品の感情と言語の差異を分析した。摩羅（1996）は汪曾祺の生育的背景、人生経験、精神的な成長を詳しく考察した上で、精神分析学という視角から小説が表現した家父長への渴望、幸せな少年時代への憧れ、人生の悩みと世間の苦難等に対する不安と恐れを掘り出し分析し、その背後に隠されている時代性と文化心理の構造を明らかにした。これは従来の研究と違い、独自の視点で汪曾祺の文学創作の源を探求するものであり、新たな研究方向を示し、高く評価されたものである。1990年代の汪曾祺研究は多面的・多角的に行われ、豊富な研究成果を取得して、従来の研究を引き続くものと新たな研究経路を試すものに分けられているのがその特徴と考えられる⁶⁾。

21世紀に入ると、汪曾祺研究は1990年代の研究状態のまま、既にボトルネック状態になっていると見なされ、さらに検討できる余地はほとんどないと考えられてきた。研究者たちは汪曾祺の初期（1940年代）の作品に目を向け、80年代の汪の作品との比較を行い、汪曾祺と北京流派作家とのつながりを検討し、また、汪曾祺が清の小説『聊齋志異』の中の12篇を改作して「聊齋新義」とした作品の意義を研究した⁷⁾。総じて言えば、新世紀の汪曾祺研究は1980、90年代の研究成果を踏まえ、さらに広く、細くくなされている。しかし、研究成果は多く残されているものの、検討の余地はまだあると考えられる。たとえば、汪曾祺の作品はこの40余年間にずっと人々に愛されている。その魅力はいつたいなんだろうか。現代社会に生きている人たちが汪曾祺作品から何をもらえるかということあまり論じられていない。

2. 「癒し」と「癒し系文学」

最近、中国では「癒し系だね」、「癒された」、「癒されたい」などの言葉をよく耳にしている。雑誌、広告やインターネットで調べてみると、この日本から輸入された「癒し系」という言葉がすっかり人々の日常生活に定着し、各分野に亘っていて、日本の「癒し系」音楽、「癒し系」文学、「癒し系」アニメや「癒し系」玩具などの「癒し系」シリーズが多くの人々に愛されるようになったということが分かった。では、「癒し」という言葉はどのように表わし、どういう意味であろうか。

1990年代には、「癒し」、「癒し系」という言葉はなく、ただ「癒す」という言葉があり、病気や傷を治すことあるいは苦痛を和らげることを表している。「癒し」の日本での最初の登場はというと、「マスコミに初めて登場したのは1988年の後半であり、1994年から急増している。」とあり、1998年に新聞に大きく取り上げられた最初の記事に「（癒しという）言葉には、身体の病や傷を治すだけでなく、心の苦しみを解消し、人間をまるごと健やかな状態にする」と説明されている⁸⁾。要するに、「癒し」は「癒す」の名詞化された言葉であり、単純に病気や傷を治すことではなく、精神的な面の安らぎのことを強調している。そして、「癒し」という機能を持っている物を「癒し系」と呼ぶように変化してきている。

心理学者の御法川誠次郎は「『癒し』という言葉には…(中略)…全体的に人間をとらえ直し、本来の人間性を取り戻す感じがある。」と述べている。これは人の病気や心の傷だけを治す対症療法を行う治療に対して出された定義であり、癒しは人間の存在にかかわっていると強調された⁹⁾。文化人類学者の池田光穂は「(癒しは)ふつう病気や苦悩を和らげたり治すことである。」「身体的な病気がなおるといふ治療よりも、心身が平穏になるといふ積極的な意味がある。」と語る¹⁰⁾。社会学者である多田敦士は「『癒し』とは人間の心身を分けることなく全体としてとらえ、主観／客観を問わず心身の不全な状態に対して、その全体としての回復の働きである。」と指摘している¹¹⁾。まとめてみると、癒しという言葉は全体性を持っており、人間の、心身ともに温かく健全である状態を指し、とりわけ、精神的な健康状態が強調されていると言えよう。

「癒し系」は人の心を癒すことができる物のことである故に、「癒し」や「癒す」などの言葉の動作主体は自分自身であり、「癒し系」の動作主体は他のものなのである。即ち、他の物に癒される意味になる。1999年から「癒し系」という言葉はだんだん各雑誌に登場してきた。日本の各分野がこの流行語に乗り、「癒し系」に関する物は多くなり、それらは「癒し系」の発展を加速している。最初に「癒し系」という言葉が多く出てきたのは

音楽の分野である。その後、「癒し系」音楽の発展と共に、「癒し系」アニメ、「癒し系」映画、「癒し系」文学、「癒し系」アイドルなどの視覚的な物も同時に増えてきた。それらは日本の「癒し系」発展の頂上を推進し、世界に広がった。文学、音楽、ドラマなどは国境がないものであり、日本の「癒し系」文化は知らず知らずのうちに各国でも流行るようになった。その中の「癒し系」文学は即ち癒しの機能のある文学作品のことであろう。日本の代表的な「癒し系」小説と言えば、世界で大ヒットした吉本ばななの『キッチン』と村上春樹の『ノルウェーの森』である。

文学の役割というと、中国の既存の文芸理論の記述にはおおよそ認識機能、教育機能と娯楽機能が挙げられているが、心の傷を慰め、心理トラウマを癒す機能が疎かにされている。葉舒憲（1998）が文学の役割について、「文学は人類特有の符号で作られた世界であり、文化動物としての人間にとって、精神生存の特別な故郷である。文学は（人間の）感情、意志と理性の間の衝突と張力を調節し、心に刻み込まれる障害を解消し、身体と心、個人と社会のバランスを維持し、健全円満な人間性を培うことに、取って代わることでできない作用を持っている」と指摘する¹²⁾。作家は文学作品を創作することによって、心の底の苦しみ、悲しみ、心の傷や希望を作品の中に紛らわし、理性と感情のバランスを保てるようになり、本来の人間性を取り戻すことができる。それに対して、読者は文学作品を読むプロセスで共鳴を感じ、感動し、自分の欲求、憧れといった本音を代弁されているように、精神が浄化され、心身ともに健康状態を回復できる。これがいわゆる文学の癒しの機能であり、「癒し系」文学は癒しの機能を顕著に持っているものであると考えられる。

3. 「受戒」——大人に捧げる癒し系の恋愛童話

前述のように、「受戒」¹³⁾は汪曾祺が30年間の創作空白期を経験した後、文壇に復帰した「風俗画小説」の代表作であり、最も愛読されている作品の一つでもある。この作品は1930年代の江蘇省北部の高郵地域を舞台に農家の少女小英子と沙弥の明海との間の恋愛を生き生きと描いた。田んぼの少ない農家の4番目の息子である明海は7歳のころ、出家に行くことを親に決められた。明海自身もこのことが自分の宿命と考えている。『三字経』や『百家姓』や書道等を勉強して、13歳になった明海は和尚さんである叔父に面接を受けるように声の大きさ、顔の様子、記憶力を審査された後、故郷を離れ、叔父に庵趙荘というところの「葦荊庵」というお寺に連れられ、小僧になった。お寺の和尚さんたちはお経を唱えたり、法事をするためのなどの練習をしたりしているが、戒律を守らない生活をしている。中には結婚している人もいて、祝日に豚を殺し、酒も飲み、肉も食べる。明海はお寺で毎日掃除、水汲みなどの仕事をし、朝晩お経を唱える練習をさせられる。

お寺の隣に農家の少女小英子一家が住んでいて、明海は初めてお寺へ行く船で自分と同じ年頃の少女と知り合い、小英子の家族たちとだんだん親しくなった。暇なとき、明海はよく小英子の家へ行った。小英子はかしく活発で、カササギとたとえられるほど話好きで、美しい少女である。明海はいつも小英子の家の野良仕事などを手伝い、絵を書くのが上手で、農作歌を歌うのが優れていることで小英子、小英子の家族たち、周りの人々に好かれている。小英子と一緒に野良仕事をしているうちに、明海は小英子から異性の愛嬌が感じられ、胸中に騒めきと新鮮な気分が渦巻き、彼女に惹かれていた。純真な愛が少しずつ二人の間に生まれた。

明海は県内で最も大きい寺「善因寺」へ受戒に行った。帰り道の船で、明海と小英子の一問一答で小英子の明海に対する愛を確かめた。明海は自分が将来「善因寺」の住職になるかもしれないことを小英子に話した。小英子は明海に住職にならないでほしいと思ひ、本気で嫁になってほしいのかを明海に聞いてしまった。明海は最後に小さい声で「ほしい」と答えた。すると、二人の周りの湖の風景が読者に呈されただけで、小説が終わり、余韻が延々と残る。

「受戒」にはドラマチックなストーリーがなく、ごく平凡な人々とそれらの人達のごく普通の日常生活が淡々と書かれている。この点は汪曾祺作品の特徴だと言ってよい。汪曾祺は「受戒」に展開される環境に、美しい水郷という完璧な閉ざされた空間を設定している。小さな庵趙莊は江南水郷のような美しい自然風景が読者の目の前に浮かんでくる。収穫した稲を見守るために、明海と小英子が夜、一緒に脱穀場で番をする場面がある。

晚上，他们一起看场。——荸荠庵收来的租稻也晒在场上，他们并肩坐在一个石碾子上，听青蛙打鼓，听寒蛇唱歌，——这个地方以为蟋蟀叫石蚯蚓叫，而且叫蚯蚓叫“寒蛇”，听纺纱婆子不停地纺纱，“吵——”看萤火虫飞来飞去，看天上的流星。

(汪曾祺 (1980) 「受戒」『汪曾祺全集』2, p. 101)

二人は静かな野原で、稲の香りを感じながら、虫の鳴き声を聞き、螢が飛び交うのを見、流れ星が空を引くのを見る。まさに絵のような描写である。小説の最後の段落の風景描写が読者にとって、最も印象的である。

芦花才吐新穗。紫灰色的芦穗，发着银光，软软的，滑溜溜的，象一串丝线。有的地方结了蒲棒，通红的，像一枝一枝小蜡烛。青浮萍，紫浮萍。长脚蚊子，水蜘蛛。野菱角开着四瓣的小白花。惊起一只青桩（一种水鸟），擦着芦穗，扑鲁鲁飞远了。……

(汪曾祺 (1980) 「受戒」『汪曾祺全集』2, p. 106)

白い花、緑色の葦、水鳥、青い湖、広い田んぼなどで織り込まれる景観が汪曾祺の故郷、大自然に対する愛を表している。汪曾祺の故郷は中国の江蘇省高郵県（現在の高郵市）であり、高郵県には有名な高郵湖がある。汪は故郷は水郷であり、水辺で育ち、目で見ているのも、耳で聞いているのも水にほかならない。水は作品の風格にも影響したと語る¹⁴⁾。高郵県第五小学校の隣にお寺があり、「受戒」の環境は汪曾祺が田舎のある庵に泊まったころの経験である。幼少時代の記憶と経験は汪曾祺の創作に影響した。したがって、汪は抒情的な、田園のような古典詩の雰囲気を作り出した。

そして、「受戒」は半分の紙幅を使って地元の風俗、人情を紹介し、衣食住と交通から山、川、湖に至るまで、さまざまな風俗を含む日常の世界を表している。明海が初めて町に出てきたころの町の賑やかな様子は次のようである。

县城真热闹：官盐店，税务局，肉铺里挂着成片的猪肉，一个驴子在磨芝麻，满街都是小磨香油的香味，布店，卖茉莉粉，梳头油的什么斋，卖绒花的，卖丝线的，打把式卖膏药的，吹糖人的，耍蛇的，……（汪曾祺（1980）「受戒」『汪曾祺全集』2，p. 91）

明海の3番目の師匠は民謡を歌うのが得意で、このような民謡を歌った。

姐和小郎打大麦，

一转子讲得听不得，

听不得就听不得，

打完了大麦打小麦。

（汪曾祺（1980）「受戒」『汪曾祺全集』2，p. 95）

また、小英子の姉が嫁ぐ前に、刺繍をされた服を用意する場面に、刺繍の特別なやり方についてこう書いている。

所谓“乱孱”是绣花的一种针法：绣了第一层，第二层的针脚插进第一层的针缝，这样颜色就可由深到淡，不露痕迹，不象娘那一代绣的花是平针。深浅之间，界限分明，一道一道的。（汪曾祺（1980）「受戒」『汪曾祺全集』2，p. 99）

汪曾祺は城鎮の旧式地主の家庭の出身で、小さい時から良好な伝統教育と良い芸術の影響を受けた。汪は幼いころから中国の古典文化を学び、画家、旧式的な知識人であった父親の影響で、詩歌、古典画などに興味を持った。

汪曾祺は「談談風俗画」の中で次のように説明している。

我是很爱看风俗画的。十七世纪荷兰学派的画，日本的浮世绘，我都爱看。……宋代风俗画似乎特别的流行，《清明上河图》是一个突出的例子。我看这幅画，能够一看看半天。我很愿意在清明那天到汴河去玩玩，那一定非常好玩的。南宋的画家也多画风俗。我从马远的《踏歌图》知道“踏歌”是怎么回事。

(汪曾祺 (1984)「談談風俗画」『汪曾祺全集』9, p. 298)

風俗画に含まれる民俗、物産、食べ物といった題材はみな汪曾祺の興味のあるものであ
ると考えられる。それによって、風俗画小説の創作手法で作品の風俗的雰囲気強化さ
せ、読者の興味をそそらせる。

汪曾祺作品の題材は政治から離れ、自然で純粋な人間性を追求しており、「士大夫」の
ような人生の百態を温かく描いたと指摘されている¹⁵⁾。「受戒」が純粋な、ありのままの
人間性を描写する点がその癒しの最も根底にあるものと思われる。「受戒」は明海と小英
子の間の純粋な愛を描いただけでなく、明海と彼の叔父、小英子と彼女の姉、明海と小英
子の母親、同じ村に住んでいる村民たちの間の温かい人情を細かく書いている。

明海と小英子の薄い初恋が詩歌のような筆致で含蓄的に描かれている。

她挎着一篮子荸荠回去了，在柔软的田埂上留下了一串脚印。明海看着她的脚印，傻
了。五个小小的趾头，脚掌平平的，脚跟细细的，脚弓部分缺了一块。明海身上有一种
从来没有过的感觉，他觉得心里痒痒的。这一串美丽的脚印把小和尚的心搞乱了。

(汪曾祺 (1980)「受戒」『汪曾祺全集』2, p. 101)

また、明海の叔父は明海の出家の準備に注意事項を話したりして、お寺へ出発する前
に、自分の和尚さん用の服を直してもらい、明海にあげた。小英子の母親は明海のこと
が好きで、明海を義理の息子にした。

大娘看着也喜欢，搂住明海的和尚头：“你真聪明！你给我当个干儿子吧！”

小英子捺住他的肩膀，说“快叫！快叫！”小明子跪在地下磕了一个头，从此就叫小英
子的娘做干娘。

(汪曾祺 (1980)「受戒」『汪曾祺全集』2, p. 99)

野良仕事が忙しい時期に、同じ村の村民たちがお互いに手伝ったりしている。

这地方兴换工。排好了日期，几家顾一家，轮流转。不收工钱，但是吃好的。一天吃六
顿，两头见肉，顿顿有酒。干活时，敲着锣鼓，唱着歌，热闹得很。其余的时候，各顾

各、不显得紧张。

（汪曾祺（1980）「受戒」『汪曾祺全集』2, p. 100）

汪曾祺は「受戒」の創作、自分の文学創作の目的についてこう説明している。

（我）只是带着一点激动说：“我要写！我一定要把它写得很美，很健康，很有诗意！”
写成后，我说：“我写的是美，是健康的人性。”美，人性是任何时候都需要的。

（汪曾祺（1984）「关于『受戒』」『汪曾祺全集』9, p. 149）

我希望我的作品能有益于世道人心，我希望使人的感情得到滋润，让人觉得生活是美好的，人，是美的，有诗意的。你很辛苦，很累了，那么坐下来歇一会儿，喝一杯不凉不烫的清茶，读一点我的作品。

（汪曾祺（1990）「我的创作生涯」『汪曾祺全集』10, pp. 75-76）

「受戒」にはところどころに温かい人情があふれ、人々の疲れを癒してくれる。政治権力のない桃源郷のような世界における様々な形の愛、人間性が徐々に読者の心に沁み込んできて、楽しい愛の旅のようで、残酷な現実社会のことを忘れさせ、ストレスを解消してくれる。それが人生の悩み、苦痛を捨てさせ、心のどこかにしまっている愛を求める勇気がよみがえる。癒しの方法としては、患者自身の心に潜んでいる「内なるヒーラー」を呼び出すこと、患者が自分の生き方や本来の自分を発見する手伝いをするなどがある¹⁶⁾。いうまでもなく、「受戒」の中の美しい自然、さまざまな民俗、温かい人情で織り込まれる世界がこのような癒しの力を持っている。

4. む す び

21世紀の現代に生きている人々は毎日生活の中のストレスに直面し、複雑な人間関係、激しい競争、効率を求める環境の中で、心がもろくなり、精神的な欲求が高まり、温かみやリラックスを求める。「受戒」はまるで清い溪流のように人々の心の中に流れ込んでくる。

「受戒」は和尚さんたちの日常生活を書いている。面白いことに、和尚さんたちは普通の俗世の人と同じように暮らしており、厳しい戒律も神秘的な雰囲気もなく、人間性豊かな面白みと活力があふれる。小僧明海と農家少女小英子の純粋な愛は虫の鳴き声、飛び交う蛍、空を引く流れ星、湖の流れている水を共にして、鮮やかに、いきいきと伝わった。美しい自然、面白く多様な民俗、ありのままの人間性は「受戒」の癒しの特徴と考えられ

る。

この小説を読むとき、読者は自分自身の青春や初恋や故郷のことが思い出され、喜びや希望を生み出すであろう。葉舒憲は「文学は読者の思考と想像を奮い立たせ、深いあるいは浅い共鳴の中で、人の精神力を移動し、心身の状態を改善し、治療する効果を実現することができる」と述べる¹⁷⁾。「受戒」は絵のような風景描写、詩のような言語で簡潔的に創作され、人々を感動させている。この小説が描いた理想的、純粋な人間性は人々を癒す力を持っており、現代社会に生きている大人に捧げる癒し系の恋愛童話のようである。これこそが汪曾祺作品の魅力であり、汪曾祺はある意味では現代的な作家と言えよう。

注

- 1) 文人は中国の伝統社会に生じた人間類型の一つであり、学問を修め、文章をよくする人のことである。
- 2) 『光明日報』2020年7月8日9版。
- 3) 徐強(2021)「汪曾祺年譜簡編」『汪曾祺全集』12, 北京:人民文学出版社, pp. 345-375を参照。張煜(2016)「汪曾祺作品の形成過程についての一考察」博士論文, 大阪:大阪大学大学院 (<https://doi.org/10.018910/61840>)。
- 4) 唐攀(1980)「贊『受戒』」『文芸報』, pp. 43-44。
- 5) 季紅真(1983)「汪曾祺小説中の哲学意識と審美態度」『読書』, pp. 15, 19。
- 6) 馬傑(2013)「汪曾祺小説研究綜述」『広西師範学院学報』(哲学社会科学版), pp. 57-58。
- 7) たとえば、韶寧寧(2005)「汪曾祺小説前後期演變的精神史軌跡」『文芸争鳴』;方星霞(2016)『京派の承伝与超越—汪曾祺小説研究』南京:南京大学出版社;楊紅莉(2005)「汪曾祺小説『改写的意義』」『文学評論』。
- 8) 御法川誠次郎(1999)「癒しについての研究」『モラロジー研究』, p. 52。
- 9) 御法川誠次郎(1999)「癒しについての研究」『モラロジー研究』, p. 53。
- 10) 池田光穂(2000)「『癒し論』の文化解剖学」佐藤純一編『文化現象としての癒し』[共著], メディカ出版, p. 188。
- 11) 多田敦士(2010)「癒しの諸相」『龍谷大学社会学部紀要』37号, p. 54。
- 12) 葉舒憲(1998)「文学与治療——关于文学功能的人类学研究」『中国比較文学』, p. 88。
- 13) 汪曾祺(2021)「受戒」『汪曾祺全集』2, 北京:人民文学出版社, pp. 90-106。
- 14) 汪曾祺(2021)「自報家門」『汪曾祺全集』5, 北京:人民文学出版社, p. 104。
- 15) 方錦煌(2013)「論沈從文与汪曾祺文化理想的異同—以『辺城』与『受戒』為例」, pp. 89-93。
- 16) 御法川誠次郎(1999)「癒しについての研究」『モラロジー研究』, p. 73。
- 17) 葉舒憲(2010)『文学人類学教程』北京:中国社会科学出版社, p. 265。

参考文献

- 季紅真(1983)「汪曾祺小説中の哲学意識と審美態度」『読書』。
 夏逸陶(1990)「憂郁空靈与明朗洒脱—沈從文, 汪曾祺小説文体比較」『中国文学研究』。
 摩羅(1996)「末世的溫馨—汪曾祺創作論」『当代作家評論』。

- 摩羅（1997）「悲劇意識の压抑与覚醒」『小説評論』.
- 葉舒憲（1998）「文学与治療—關於文学功能的人類学研究」『中国比較文学』.
- 御法川誠次郎（1999）「癒しについての研究」『モラロジー研究』（https://www.morology.jp/wp-content/themes/mor/img_research/45minorikawa.pdf）.
- 韶寧寧（2005）「汪曾祺小説前後期演變的精神史軌跡」『文芸争鳴』.
- 楊紅莉（2005）「汪曾祺小説『改写的意義』」『文学評論』.
- 多田敦士（2010）「癒しの諸相」『龍谷大学社会学部紀要』37号, pp. 52-62.
- 雨宮俊彦（2012）「癒しの心理構造について」日本機械学会〔No. 12-39〕シンポジウム：スポーツ・アンド・ヒューマン・ダイナミクス講演論文集, pp. 401-406.
- 馬傑（2013）「汪曾祺小説研究綜述」『廣西師範学院学報』（哲学社会科学版）.
- 方星霞（2016）『京派的承伝与超越—汪曾祺小説研究』南京：南京大学出版社.
- 張煜（2016）「汪曾祺作品の形成過程についての一考察」博士論文, 大阪：大阪大学大学院（<https://doi.org/10.018910/61840>）.
- 葉舒憲（2018）『文学与治療（増訂本）』西安：西師範大学出版總社.
- 楊学民（2018）『汪曾祺及里下河派小説研究』北京：人民出版社.
- 翟文毓（2020）『文化視閥中的汪曾祺研究』北京：北京大学出版社.